

ちは、毎日のように弁当持ちで湯浴みにくるらしい。

弁当と湯と茶話の日永かな

こういう余生も悪くないなあ、と、なんとなく思ってみる。しかし、どうも自分にはこんな日々はやって来ないようにも思われる。

温泉を出ると目の前に紫雲英の咲き満ちる田が広がっていた。美しき田園。私は、ただこの風景を見たさにわざわざ旅に出ることさえある。

田のなかに動くものがある。

げんげ田を小蛇はたどりたどり行く

ここもまた数多の生き物たちの命の庭なのであった。

翌日は、良く晴れて暑くなった。

川筋を変えて、栗野川のほとり、広々とした田に沿うて行くと、これまた何気ない小祠が道の辻に建っている。中に、ふたりのお地藏さんが立っておわす。右のお地藏さんの台座に刻まれた文字を辛うじて判読してみると、どうやら天保元年九



日野温泉「憩いの家」には常連さんたちの笑顔がいっぱい。



こういう里山の照葉樹林は、太古以来変らぬ景色で、万葉人の目にも親しかったに違いない。かかる豊かな景色が、多くの人の目にも留まらず、平然と破壊されていくのを見ると、心がズキリと痛む。これをひとたび破却してしまえば、二度と取り戻せない。そこに息づいている千万の生き物達も、住み家を失って、やがて生きるを止めるであらう。それは、海のようにも山のようにも悲しいことではないか。

樟や椎の若葉に覆われた山々を目睹しながら、そんなことを、思い思いしつつ、この野をと行きこう行きして、さしも永き春夏の交の日も過ぎていく。

日本の里々を巡歴していると、いつも気づくことは、そちこちに地元の人しか行かないような、かそけき温泉が野中に蔵されてあることである。

かくて行く行く、木屋川の支流、中の川の片ほとりなる日野温泉に逢着する。まるでそこらの仕舞うた家かと疑われるような、さりげない佇まいの一軒家である。

ちようど、数人のおばあちゃんたちが湯上がりのお喋りに興じているところであった。この、足の地に着いた空気、これが本当の温泉というものかもしれぬ。もう家のことは倅どもに譲って、のんびりと日々を送っているらしいおばあちゃんた

入浴後、夕食時間まで一の俣温泉付近を散歩。意外とこんな時に俳句がひらめくこともある。

